



特別支援教育を考える



【特別支援学級の先生のお話】

障害児教育に取り組んで30年ほどになります。去年、9年勤務していた学校から今の学校に転勤して来ました。転勤したのは特別支援教育が始まって2年目のことです。そこでびっくりしたことは、教室がアコーディオンカーテンやロッカーなどで仕切られ、個別の勉強をする場所が変わっていたことです。その年受け持った学級は、1人が1年生から特別支援学級に在籍していた4年生の子。あとの4人はその年入級してきた子たちです。3年間在籍していた子は、国語と算数以外は全部学年のあるクラス（通常学級）で勉強していました。袖口が掃除の時ちょっと濡れてしまうとすぐに「着替える」と大騒ぎをし、粘土をこねて手がべたべたになるのをとても嫌がる、間違えた時にそれを訂正されるのがイヤ、気に入らないことがあるとなかなか課題と折り合いがつけられないというような子でした。

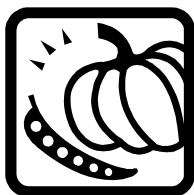
30年間障害児教育に取り組んできて、3年間障害児学級に在籍していれば、ほとんどの子はそういうことを克服していました。でもその子は克服できていない、そのことにもびっくりしました。この学校の先生は平成16年度から、特別支援教育を先取りして、個別指導や通常学級との交流などの取り組みに力を入れていました。このまま特別支援教育が進んだら、その子の持っている障害の軽減・克服が出来るのか、非常に疑問に思いました。私が目指してきて、今まで取り組んできた教育と中身がとても違ってきていると感じました。それで、担任の先生に呼びかけて勉強会を始めました。

生活の主人公になってこそ、子どもは育つ

私は、乳幼児期や学童期は、障害を軽減・克服し、発達を作り出していける大事な時期ととらえて、ずっとやってきました。生活の主人公になってこそ、子どもは育つと考えて取り組んできました。

具体的な事例として、前任の学校で、通常学級の子どもを支援して、19年度から障害児学級に入級するまでの取り組みをお話します。

A君は入学した頃は、目の前にいる先生を捕まえて一方的に話をしてくる、ニコニコ明るい子でした。学校に来てそのまま教室には入らずに、お花摘みをしたり、出会った先生に話しかけたりして、1人で教室に入って朝のいろいろなことをするという事はしませんでした。人との会話が一方的だったり、やっていることをなかなか切り替えられなかったり、1年生の運動にはなかなか参加できず、一人でお花のところへ行っていたり、自分の興味のあるところにいるという感じでした。



特別支援教育の中では、養護学校との連携という方向になるのだといわれていましたので、積極的に養護学校と連絡を取って巡回指導に来てもらい、発達検査などをしてもらいました。彼の場合は、広汎性発達障害の状

況があるといわれました。

私としては、A君が持っているような問題というのは、興味・関心の幅を広げて生活経験を豊かにする活動や、その場その場でルールや集団思考の学習の仕方を身につけるということを小さな集団の中でやっていけば、克服できるのではないかなと思うような課題でした。でも、それを通常学級で取り組むのは、いくら介助の先生がいても限界があるのではないかなと思っていたので、私のクラスへ来ればいなあと思っていました。1年生の取り組みの中では、学校全員で取り組もうということで、校長・教頭も入りまし、空き時間の先生がつくというように、言われているようなことは全部したのですが、A君が学級にいること自体イヤになる、いるためには大好きな電車の絵を描いているしかない、そんな感じになっていました。時々学級から出てしまって、学校の中を探検しているうちに障害児学級を見つけて、それから顔を出すようになりました。そんな中で、学級でやっていることに対して、自分もやりたいと言い出し、ポシットを作ったりしました。教室にいさせるために、こだわっている絵を描かせざるを得ない状況は、ますますこだわりを強める学習をしていることになるので、私はとても歯がゆかったのですが、やっとお母さんが「1日1時間なら通級いいですよ」と了解してくれたので、彼も大きな顔をして障害児学級へ来られるようになりました。2年生の2学期頃からは、いくら説得しても通常学級へ戻っていかなくなりました。お母さんも医療機関から「個別指導がいい」とアドバイスされて、やっと決心をして彼が障害児学級で勉強することを了解しました。まだ籍は移していませんが、ほとんどの時間を障害児学級ですごしています。



障害児学級というのは、

一人ひとりの子どもが主人公としていきいき活動・学習することが保障されている場所

うちの学級では、形としては残りませんが、自分から手を出し、笑い声や笑顔がいっぱい出る活動に取り組んでいます。字が書けても文章が書けない子どもが多いので、生活画という、それを絵で表現し、お話を聞くということを大事にして取り組んできました。毎日5時間目はじめに時間を設けてやってきました。

掃除の時間などで通常学級に戻らなければならない時、彼はよくトイレに逃げ込んで、トイレットペーパーをグルグル丸めて流してトイレを詰まらせたりしていました。そこで、トイレットペーパーを紙粘土にして、彼に先生になってもらってお弁当作りをしました。切り紙細工は形もとらないで上手に作るので、彼が切ったものを葉に仕上げました。

体もいっぱい動かす中で、偏食もなくなっていきました。無理に食べさせなくても、自分から食べてみようという気持ちも増えてきました。匂いや音に敏感な子でしたが、楽しい活動の中では手が泥んこになっても使えるようになりました。

そうした中で、お母さんが「障害児学級で勉強するようにします」と言えるようになるまで3年間かかりました。子どもの思いと保護者の願いはやはり少しずれてしまいます。子どもの立場に立って考えられるようになるまでには時間がかかります。そのためにいろいろな手立てをとらなくてはならない。うちの場合は、生活画を一冊の本にしたり、いろいろな活動を写真にとって子どもたちと一緒にアルバムを作って渡したりということを続ける中で、「こんな笑顔で活動しているのだったら」ということで、お母さんは決心されたのだと思います。

障害児学級というのは、居場所が保障されていて、一人ひとりの子どもが主人公としていきいき活動・学習することが保障されている場所。訓練的に「挨拶ができるようになる」「お掃除ができるようになる」ということを目標にするのではなく、まるごとの発達をねらってやってきました。小さいながらも集団での活動を大事にしてきました。



お金も来ない、人も来ない、 今ある施設・人材で、67万人プラスした教育をやりなさいと

今まで障害児教育といえば、知的障害、肢体不自由等7つの障害の子どもたちが対象だったのですが、特別支援教育はADHD、LD、高機能自閉症などの子どもたちにも対象が広がりました。そうして新たに対象になった子たちが約68万人いるということです。

今ある人的資源を生かして特別支援教育をやりなさいということで、他の先生が来ないので校長や・教頭も取り出し指導を見えています。

当初の特別支援教育構想の中では、障害児学級を廃止し、取り出し指導をする特別支援教室に変えるということでした。これは多くの保護者や現場の先生たちの運動によって、当面障害児学級は残ることになりましたが、基本的には全員通常学級の籍にするということです。問題だと思うのは、教員が来ないこと。担任の意識改革だけで配慮しながらやりなさいということなんです。私たちは何度も研修しながらやっていますが、やはり40人学級ではしんどい状況があります。だから少人数学級を本当に実現してほしいと思います。

転動してきてびっくりしたといいましたが、個別指導計画というのが、短期で実現可能な目標を掲げなさい、それを評価しなさいということなので、教育というより訓練のような中身にならざるを得ない状況になっています。そういうことが問題だと思っています。

特別支援学校に関しては、いわゆるセンターの機能を果たすよう位置づけられました。流山に今まで高等養護学校があったのですが、いわゆる職業教育、働いて税金が納められる子づくりに力を入れる、能力主義的な再編になっているのではないかと思います。

私が大学生だった1970年前後は、就学猶予免除制度がまだありました。不就学をなくす取り組み・学習が広がって行って、家庭訪問して日曜学校をしたりする中で、1970年には与謝の海養護学校ができました。その養護学校は、すべての子どもに等しく教育を保障する学校づくり、子どもを学校にあわせるのではなく子どもに学校を合わせる学校づくり、学校づくりは箱ものを作るのではなく民主的な地域づくりと、そのような理念で建てられた学校です。

その後、1979年に養護学校が義務制になりました。それまでは盲学校、聾学校と、税金につながるような人たちの教育は義務制になっていますが、知的障害のある子の教育はなかなか義務制になりませんでした。

そんな中で、「21世紀の特殊教育のあり方について」というのが2001年に出了ました。それは、私たちが願っているようなものになるなあとと思うような素敵な中身でした。でも2003年には、お金も来ない、人も来ないような、今ある施設・人材で67万人プラスした教育をやりなさいというような教育のあり方になりました。この2年間の中に何があったかということ、一つは2002年2月から3月にかけて、全国の学校の通常学級にLDやADHDなどの今回新たに対象になった子どもたちがどれくらいいるかの調査があったこと。もう一つは2001年に小泉内閣が発足して、いわゆる構造改革が行われたことです。

【質疑応答&フリートーキング】

Q) 今の特別支援学級はいずれなくなってしまうのですか？

A) 保護者や現場の先生たちなどの取り組みで、当面 特別支援学級は残すということになっていますが、ゆくゆくは特別支援教室にするということです。学級があるのと教室というのではどこが違うかということ、教員配置が全く違ってきます。例えば全校で 20 学級ある学校に特別支援学級があれば 21 学級になって、教育予算も教員配置もその分多くありますが、教室になると 20 学級分の予算と教員しか来なくなります。それに、特別支援学級で学びたい子がいっぱいいます。そこで学んだほうが伸びていく子がいっぱいいます。

Q) 現在の特別支援学級の定員と先生の配置はどうなっていますか？

A) 子ども 8 名に対し担任 1 名です。学級もいろいろな障害で作れます。だから自閉・情緒の学級、難聴学級、肢体不自由の学級といろいろ作れますが、知的障害と情緒障害が多いです。松戸は種類が多いですね。通級というのは、通常学級に籍を置く子どもがある時間特別支援学級に通うというものです。

松戸の特別支援学級数（通級を含む）		
	小学校	中学校
知的障害特別支援学級	12 校	6 校
情緒障害特別支援学級	6 校	3 校
言語障害特別支援学級	7 校	—
弱視特別支援学級	1 校	—
難聴特別支援学級	1 校	1 校
病弱特別支援学級（院内学級）	1 校	1 校

交流というけれど、障害を持った子どもの願いからの交流なのか

Q) 通常学級で生活して、いろいろな子どもたちと関わりながら育ててほしいと願う場合と、その子の障害に応じた教育を受けて、より良く伸びてほしいと願う場合と、親の中にもいろいろな考え方があると思います。私は地域の学校で育ててほしいと考えるのですが、地域の学校に特別支援学級がない場合、遠くに通わなければならないケースもあります。そういうことを考えると、いったいその子にとってどちらがいいことなのでしょう。

A) 「地域で育つ」という意味が漠然としています。障害児学級がどの地域にもあって、住んでいる校区の学校の障害児学級へ通って、休み時間やいろいろな時間に通常学級の子どもたちと交流するということを「地域で育つ」ととらえるのか。全面的に通常の学級で育つこと・学ぶことが「地域で育つ」という意味なのか。

Q) 学校を卒業した後の生活を考えた時に、学区外の学校に通っていると地域の人たちとのつながりはどこで作るのか。卒業後の子どもの生活を見据えて、「地域で育つ」ということはどういうことなのかを私は知りたい。

A) 保護者の方の生き方が影響すると思う。今年私の学級に入学してきたダウン症の子は、こんなにいろいろなことができるのだと思うくらい、身の回りのこともできるし、人との関わる力もあるし、私が小学校を卒業するまでに身につけてほしいと思う力を、入学した時点で既に身につけている。その子の保護者の他の子どもたちも含めた子どもへの接し方を見ていると、「だからこんなふうに育ったのだ」と思うような接し方をしていました。交流というけれど、障害を持った子どもの願いからの交流なのか。地域のみ

なで見守りながらやっていけばいいという目で「交流」と言うのでは、本人がとてもしんどい場合がある。本人の気持を考えてあげないと、その子どもに緊張を強いるばかりになってしまう場合もあります。

Q) 障害の種類にもよるし、親の生き方についてもその障害によって変わってくる。その障害についてどうしたらよいかというアドバイスができる専門家が少なすぎる。だから親は戸惑うばかりで、どうしたらよいかさ迷いながら生き続ける。何がよいのかわからず、とりあえず目の前のことを処理するだけに時間を費やしてしまう。

Q) 親同士のかかわり方も大切なのではないか。

A) 一番身近なところは、通常の学級にいるADHDの子たち。パニックを起こさざるを得ない、困っている子たち。そういう子たちをめぐって、「殴った」「殴られた」という問題が起きるのだけれど、一番基本的なところをやらなければならないのは、懇談会などでの話し合いでお互いを理解するということだと思う。これだけ特別支援教育が変わって、国民全部で見て行きましょうという方向が出ているのに、介助の先生というのは障害児学級があるところにしか殆どつかなかった。通常の学級で手だてが必要な子に対しては、なかなか介助の先生がつかない。特別支援教育が変わった中身自体が、予算出さない、人出さない、安上がりでやってしまおうということ。

Q) 以前と明らかに違うのですか？

A) 違います。教員の配置は違います。千葉県の場合、今は子ども8人に対し教員1人ですが、15年前までは子ども8人になると担任2人になっていました。

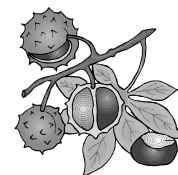
よく言われるのですが、特別支援教育というのは、通常学級にいるADHDなど4つの障害を持った子どもたちに、光はあたったけれど手は差し伸べられていないと。

■ 私の地域の学校では、ここ2年くらい、入学した時は通常学級だった子が3・4年生で特別支援学級へ移るケースが増えています。その一方で、学校と地域の連携ということで行事がとも増えている。でも地域の障害を持つ子への理解は全然深まっていない。松戸市ではすべての学校に学童保育をとということに取り組んでいる。学童保育の前に、すべての学校に特別支援学級を作ってもらって、先生も配置してもらって、必要な時には行ったり来たりということができればいいのと思います。

■ 9年前に引っ越してきた時、障害を持つ子どもを受け入れてくれる幼稚園がなかなかなくて、1ヶ所の幼稚園で「仮入園で受け入れましょう」ということになったのですが、週に2日しか受け入れてもらえなくて、それでも何とか通っていました。そこで出会った子どもたちは、子どもの認め方を教えてくれて、どんなふうに関わっていいかを教えられることが多かった。いいところを見つけてほめてくれるとか、本当に心の底から友だちだと思ってくれるし、「前はできなかったのに、こんなことができるようになってすごいね」と言ってくれる。それで初めて救われた。それでその地域の小学校で育てたいと引越しもしました。一人で生きていくということを考えた時に、人の力を得ないと生きていけないのであれば、どこどこに住んでいる誰々ちゃんではないといけない。絶対隔離は無理と考えて、特学は考えていなかった。見学に行った特学は、ガミガミと叱りながら、たたきながらやっていて、これが教育なのかと思うようなところで、そこには通わせられないと感じました。今、障害児学級の子どもの数が増えているので、集団での教育が難しくな



ってきているように思います。毎日がゲームと作業。個別の教育もほとんどなくて、何をやっているのかと見に行ったらドリル。それで今の小学校に行くことにしたのですが、それも入るのが大変でした。校長先生に「こういう子どもはいないに越したことはない」と言われました。入学して2年後から特別支援教育が本格化して、支援スタッフが派遣されることになりました。うちの子どももようやく週に2日、先生をつけてもらって、大人が常時1人ついている状態で通級に通わせて6年目になります。これから先、就職するときのことも考えると、言葉でのコミュニケーションが難しく、「このままの状態では就職もままならないから、今後の進路についても考えるように」と言われたので、今あちこち回っているところです。どこへ行ったら、そういう人とのコミュニケーションの力を付けられるのか、どういう手だてが必要なのかを教えてくださいませんか、わかりません。



教育というのは人格の形成が目的

障害を持っている子どもも、通常学級にいる子どもも、目標は一緒

- Q) お話の最初の方で、障害児学級の教室がアコーディオンカーテンやロッカーで仕切られているというのがありますが、それはどういうことですか。
- A) その担任の先生は、個別指導をきちんとやりたいという先生だったので、子どもの気が散らないように一人ずつのコーナーを造られたのだと思います。
- Q) そうすると、先生と生徒の1対1の関係はあるけれど、生徒同士の横のつながりはないですね。
- A) そういう指導がその子の特性に合った指導ではないかというスキルが広まっています。LDやADHD、自閉症などと診断はされても、障害というのは全人格の一部。でも往々にして特別支援教育という名の下に、LDだからこういう指導の仕方、ADHDだったらこういう指導の仕方と、特性に応じた対応の仕方というのが今はびこっています。でも、障害を持っていても子どもは子ども。その子の様子を見ていたら、何をしたいのかわかるし、何を伝えたいのかもわかる。子ども同士の間の仲立ちもできる。そんな中で交流もできる。それほど障害によって対応を変える必要はないのではないかと思います。教育というのは人格の形成が目的。障害を持っている子どもも、通常学級にいる子どもも、目標は一緒。普通教育の目的と違ってはいけないと思います。教育の目標は「人格の形成」です。能力に応じて等しく教育を受ける権利があるというところの、等しく受けるために手だてがいっぱい必要な子どもに対しては、大人の手も必要だし、お金も必要。予算がいっぱいつかなければいけないけれど、今回の特別支援教育というのは本当にお金をかけてない。特別なニーズのある子というのは、何も障害のある子だけではない。帰国子女の子どももそうだし、外国から来た子どももそう。虐待を受けている子どももそうだし、不登校の子どももそう。結局、私たちの学級で受けて入っていたりする。やらざるを得ないという形で。
- A) 3・4年生になって特別支援学級に移るといってお話がありましたが、子どもの状況を見ると、どこで学んだらその子ももっと伸びていくのかと思うと、何度も教育相談をしたり、面談の時に話したりしてということはありません。自分を出せる学級というのがどの子にも必要だと思うから。40人の学級がしんどくて仕方ないという子もたくさんいま

す。

制度的にひどくなるばかりです。私は、権利としての障害児教育というスローガンを掲げて、学びながらやってきましたが、結局力関係ですので、運動でしか制度を良くしていくことはできないと思っています。

自立というのは、自分はここが弱いからそこを手伝ってほしいとか、これはできるから見守っていてほしいとか、そういうことを伝えられること

Q) 養護学校が特別支援学校となって、その位置づけも変わってきているのですか。

A) センター機能が付け加えられました。仮に 25 人の特別支援学校に先生がいたら、センター機能を果たすためには地域の学校に巡回指導に行く、教育相談に応じる人を 1 人・2 人出して、残り 23 人の先生たちでやる。センター機能を果たすための新たな人員配置は来ていません。それと、今まで盲学校や聾学校など障害に応じた専門の学校がありましたが、今度は特別支援学校に視覚障害・聴覚障害の人が来てもいいですよ、どんな障害の子どもも受け入れますよとなりました。近くの学校に行けるのはいいのですが、専門の先生がなかなかいません。それに対しての研修もあるでしょうが、なかなか深めていくような体制はありません。ここにもお金と人がきません。

Q) 視覚障害・聴覚障害の人は障害の差があっても、同じ障害の人でやった方が効果があるのではないかと思うのですが。

A) 効果が上がるかどうかということよりも、よりどころになるんです。思春期になると自分の障害を理解するようになり、自分の障害とどう付き合っていくかということを考える。その時期に、やはり相談できる、人の生き方を見て自分もそんなふうになりたいと思えるようになるためには、ツーカーでわかってもらえるような集団も必要です。他の人との集団も必要ですが、同じ障害を持っているもの同士だから分かり合えるという場も必要だと思います。自立というのは、自分はここが弱いからそこを手伝ってほしいとか、これはできるから見守っていてほしいとか、そういうことを伝えられるということ。言葉でも身振りでも、その人の今持っている力でそれが伝えられるということが自立の中身の一つだと思います。

A) 障害も重なっていることもあって、知的な障害のある子でいろいろなこだわりを持っている子もいる。こだわりのある子＝自閉症の子というのはおかしい。いろいろな部分を持っている。でも障害名がつくことで救われるお母さんもいる。自分の育て方によるものではなく、そういう気質を持った子だったのだということがわかることで、ほっとして、ではどんなふうに接していけばいいのかと考えるようになり、それで子どもが変わっていくこともある。子どもがパニックを起こすということも、自分の思いが伝わらないからパニックという形で「わかってくれ」ということを出している。どうしてパニックを起こすのだろうと考え考えていくと、自然と対応ができるようになる。周りの人も、小さい時から接していると、人間としての共通部分はいっぱいわかってもらえる。だからと言って何が何でも皆通常の学級で学ぶべきということではありません。



光はあたったけれど、手は差し伸べられていない

Q) 教育の機会均等とか、平等・公平といいますが、一般的にいうと同じ量を同じだけという感じですが、福祉や教育では、そういうことではないと思う。その人にとって必要なものをすべて保障するということが機会均等であり、平等・公平でもあるということをもっと広げていかないといけないと思う。

Q) 特別支援学級の先生も通常の教員免許があればできるのですか。

A) 基本はそうです。憲法を守るという誓約書を書き、守秘義務を守りますとって教員になったのですが、学校にボランティアで来る人たちは数回の研修だけ。養成講座でも一通りの話があるだけ。ボランティアではなく、教員が必要なんです。特別支援教育を通常学級の中でやれというのなら、少人数学級にしなければできません。今までは自分でイライラを教室の隅や廊下で落ち着かせていた子どもが、思春期に入ってくると、もうそれだけでは対応できなくなる。先生も声かけなどいろいろやってきたけれど、それだけでは子ども自身が受け入れなくなってきている。目いっぱい担任が頑張り、校長や教頭が入ってやっているけど、教員が疲れ、燃え尽きてやめざるを得なくなってしまふ。障害児学級の生徒 8 人に教員 1 人でも大変です。せめて 5 人前後にしてほしい。そこに補助の先生も一人。大人が二人いると、内容が豊かになるんですね。形は介助の先生であっても、二人担任にしてほしいんです。これは、通常の学級でも同じ状況だと思います。問題はいっぱいありますが、特別支援教育に関しては、先ほどもいいましたように「光はあたったけれど、手は差し伸べられていない」という一言に尽きます。中身を豊かにしていくのは、地域の人たちの力と私たち教員の力。

■ 問題を抱えている人たちが当事者としての発言をどんどんしてもらえるといいと思います。それを皆で共有できたらと思います。